

※ 花輪ろくろ工房展 於 松岩寺ホール

十一月十三日(金)～十七日(火)

金つぎ教室の講師をお願いしている花輪滋實さんが、松岩寺山門前の鉄筋建物一階を使って、工房展を開きます。

漆の工芸作品です。これまでの例ですと、椅子とかテーブル。小さい作品では、お椀やカップ、お箸なんているのもありました。まだ詳細は不明です。即売もするのではないのでしょうか。楽しみにのぞきにきてください。

※日曜の朝の坐禅会

毎週日曜日の朝六時から七時まで、松岩寺本堂での坐禅に一般の方も参加できます。朝六時に鐘をつきますから、それまでに本堂に入ってください、初心の方にも丁寧に坐り方をご案内します。三十分ほど坐って休憩、残りの十五分ほど坐って、最後に般若心経をよんで七時には終わりです。

※教養講座

【金つぎ教室】 日程 講師 花輪滋實  
第四土曜日午後一時半～四時半まで

【仏像を彫る会】 日程 講師 高野竜生

午後一時半～四時半まで

原則として第二・四日曜日です。

【声を出して元気になる】 不定期 講師 加藤純子

平成二十七年秋彼岸

# 松岩寺だより

発行 花岡博芳

ちょっとながめの編集後記

○今年の夏はあっさりとした淡泊で、八月後半から涼しくなりました。そんな過ぎやすいある日の夕方、東京都内で開かれた東北大震災支援のチャリティコンサートへ出かけました。出かけるのがそれほど好きではない私が、何ゆえにノコンコと出かけたのか。松岩寺の本堂で三度ほどヴァイオリンを弾いてもらった奥貫史子さんが出演するからでした。でも、それだけでは重いお尻はあがらない。ヴァイオリンの古澤巖さんも出るからです。二十年前になるでしょうか。古澤さんの「ひばり」という曲をCDで聴いて以来のあまり熱心ではないファンです。コンサートへ行く途中で、都内某所商店街の納涼まつりに立ち寄りました。まつりといっても、神事仕事があるわけではなく、パレードあり、ジャズバンドあり、フラダンスあり、といった具合です。もちろん路上での出店もあります。注目すべきは、この出店でした。地元商店街の食堂や肉屋さん、酒屋さんが店の前にテントを張り出して、店の商品の中でまづりになつたものを売っているのです。もちろん、地元ばかりではありません。でも、地元外のお店は震災に関連した東北の物産店であったりします。○その一ヶ月前、熊谷つちわ祭の翌朝、十七号国道沿いで残飯が発散する異臭の中で、「ゴミを必死にかたづけける市職員の姿を見て、市外から集まって「ゴミの発生源になる露大商のために、こんな催しをする意味があるのだろうか」と抱い

た疑問を思い出しました。○世間を知らない坊主がこんなことを書くと、「食中毒が心配だし」、経費もかかるし」と、反論されるでしょう。量ではなくて、質の問題だと思っけれど。松岩寺の壇家さんには、商店街の重鎮になつていられる方もおられるけれど。たぶん、こんな文章は読んでくれないな。○こういう悪口を書くと、亡くなった先住職に似てきたと言われます。いえいえ、まだまだ。先住職はこのくらいの悪口ではすまなかつた。○悪口以外できちんと引き継いでいるのは朝と晩に梵鐘をつく事です。夏場は夕方六時についていたのですが、「朝活」「ゆう活」が推奨されるこの頃、年間をとおして朝は六時、夕方は五時で不動にしました。いろいろな人が、さまざま場所とそれぞれの思いでこの鐘を聞いておられるでしょう。うるさいと思う人もいるでしょう。○数日前のお檀家さんの通夜の席で、遺族から故人が病室に聞こえてくる鐘の音を楽しみにしていたと聞かされました。だから、さぼっちゃいけない、暑いから寒いからといって、はしょってはいけません。○新しいことをしました。たかが鐘をつくことくらいで自慢してはいけません。市街地にある△△寺さんも□□寺さんも立派な鐘楼があるのに。これ以上悪口を書くとまったくもって先住職に似てくるからこのへんで。○「初秋や 見入る鏡に 親の顔」。高崎で終生過ごした村上鬼城(一八六五～一九三八)の俳句です。(博芳記)

本堂の行事は全部椅子席です。椅子その他を準備する都合上、ご出席の方は電話・FAX等でご連絡ください。

九月二十二日(日曜日)

十一時 彼岸法要

〈法要後〉津軽三味線 佐藤通弘

春のお彼岸は、著名なヴァイオリニストをお呼びしたから、秋は大きく変えて、津軽三味線です。太い棹からはじける男性的な響きを乞うご期待。

正午すぎ終了

9月20日(日)から23日(水=秋分の日)まで、墓地ではお花とお線香を用意しています。

ぶろぐらむ

- 1 津軽じょんがら節
- 2 津軽温度
- 3 津軽三下り
- 4 十三の砂山
- 5 黒石よされ節
- 6 夏宵祭り

【さとうみちひろ／プロフィール】 1957年東京都町田市生まれ。東海大学海洋学部在学中に聞いた津軽三味線に衝撃を受け、山田千里師に入門。以後各地のコンクールで優勝し、ロックフェラー財団の奨学金でニューヨーク留学を経て、世界各地で演奏、CDを作成。現在年間80回以上のステージをこなしています。